

(Witkinは昨年亡くなった)に関して、院生の河合・鋤柄両君と、大学生の少し長期にわたったデータを取りつつある。また、認知的衝動性-熟慮性のプロセスモデル

を提案するため、院生の宮川君を援助している(日本心理学会第44回大会で発表)。

## 研究経過報告 — 昭和53, 54年度 —

田 畑 治

1. 個人研究の主要なテーマ「心理治療関係による人格適応過程の研究」に一段落をつけたところで、丁度時計の振子が右の極から左の極にうつるように、ここ2年間は、個人心理療法ならびにカウンセリングの研究は、以下のような方向ですすめることができた。

一つは、カウンセリング過程の諸現象に関するもので前年度から、カウンセリング研究会で取り組んできていたものを、学会発表にもっていくことができた。問題の所在とその具体例(東海心理学会, 53.5), クライエントの質問とカウンセラーの受けとめ(日心, 53.10), クライエントKにおける沈黙の内的意味(東海心理学会, 54.6)の一連の研究を、伊藤義美と共同ですすめることができた。

もう一つは、「体験過程療法」で著名なシカゴ大学のGendlin博士が九州大学での日本心理学会に招かれて来日し、特別講演をしたり、その後「フォーカシング技法」(焦点づけとよばれる)のワークショップが津屋崎海岸で2泊3日間の日程で開かれ、これにも参加し、ちかに体験することができた。その後も名古屋で月例会のかたちで、そのワークショップに参加した仲間有志と「フォーカシング技法」の検討会を重ねてきた。そして「フォーカシング技法」を一方で深めながら、カウンセリング過程に適用した例を発表することができるところまでこぎつけたことである。これらの成果は、日本相談学会(54.5), 東海相談学会(55.3)にその一部を発表した。この技法は、まだまだ未知の部分があり、今後一層研究を継続しなければならないと思われる。なお学部の特設講義でも「体験過程療法」をとりあげ、「身体感覚」になじむことの必要性を学生とともに学ぶことができた。

さらに、従来からの継続として「心理治療関係における治療的要因」の意味づけについて、東海相談学会7月例会(53.7)で話題提供し、反響をよんだと考えている。また、カウンセリング研究会有志により、「ミニ・試行カウンセリングの実験的研究」を行った。これは、カウンセリング学習の基礎訓練として、重要な意義をもつものと考えているが、データは目下検討中である。

この他、ケース研究のコメント〔鳴澤論文へのコメント〕「問題化・湯治場の湯・自分との再会」(臨床心理ケ-

ス研究2, 誠信書房, 54.8), 水島恵一・岡堂哲雄と筆者の共編で『カウンセリングを学ぶ』(有斐閣, 53.11)をまとめることができた。特に、ケース研究のコメントは、他人の取り組んだケースを自己の臨床的取り組みと照合でき、とても参考になることを記しておきたい。

2. 心理臨床家の養成, 教育・訓練に関する問題。大学院臨床心理学専攻コースをもつ本学部として、この問題は避けて通れない問題である。すでに数年前から、京大, 広大, 九大の三大学大学院臨床心理学研究会が発足し、ここに参加するメンバーは、相当の実力やウデを上げてきていると考えられる。専門の『研究紀要』を発刊し、その内容の水準からしても、そのように考えざるを得ない。本学がその水準に追いつき、追い越すには相当の努力が必要と思われるし、実力やウデを上げるための“スーパーヴィジョン”体制を抜本的に考えなおさなければならぬと思われる。

幸い、日本心理学会(九大, 53.10)のシンポジウム「心理臨床家の資格問題をどうするか」で大学の立場より発題する機会に恵まれたが、心理臨床領域の多様性、アンデンティティの混乱などがあり、問題は山積しているように思われる。資格の国家認定か団体認定かも不明確なままである。今後より一層検討すべきことを認識した。

もう一つこの問題で特筆すべきは、「昭和54年度心理臨床家の集い」が名大教育学部を会場として開催され、参会者から好評を得たことである。53.10の九大での日本心理学会大会期間中にもたれた「心理臨床の夕べ」に集った80余名が母体となり、村上英治教授、空井健三中京大教授と筆者の3名が、昭和54年度の「集い」の発起準備人として携わり、東海地区の心理臨床家や教室のスタッフの応援を得て、症例の相互研修会やシンポジウムをもつことができた。これは次年度、関東地区で継続して展開されていくはずである。心理臨床に関する全国規模の会合がとだえて久しかっただけに、若い情熱とエネルギーがほとばしった「集い」であったといえよう。

3. 教育臨床に関する研究。学校教育相談, 学校カウンセリングを通して、教職現場の人びとと接触する機会は年に4~5回あったが、主題を深めるところまで至ら

なかった。

4. 臨床青年心理学への接近。52年度に、共同研究で打ちだした「序説」にひきつづいて、臨床場面で出会った青年のケースにみられる発達問題を究明することに努めることができた。特に、学部全体をあげての「教育'60年代研究」の分担課題として、「現代青年の内面的構造」も、主題に組み込んで取り組むことができた。具体的な成果としては、「登校拒否・家庭内暴力・働くということ」(研究紀要25巻, 53.12), 「臨床青年心理学研究(Ⅲ)―男子症例に関する考察」(研究紀要26巻, 54.12), 「思春期登校拒否と働くということとの関連について」(東海相談学会, 55.3)がある。また依頼によって「青年とノイローゼ」(藤永保他編『青年心理学』テキストブック心理学5. 有斐閣. 53.10)をまとめることができた。

5. グループ・アプローチ, エンカウンター・グループの実践研究。近年、筆者のなかでかなり重きをおいてきている、集中的グループ体験である。まず全国学生相談教官の有志の参加によるエンカウンター・グループでは、愛媛大学福井康之・砂田良一両氏の世話によるものに参加し(53.7), 瀬戸内の中島の海浜の臨海実験所での合宿で自らを開示しながら、自己発見, 自己啓発をする機会に恵まれた。またファシリテーターとして参加したものに名大学生相談室主催のもの、民間団体主催のものなど、数カ所、数回あった。これらのグループでの体験については、「昭和53年度厚生補導特別企画・第2回自己再発見のための合宿セミナー」(54.3), 「昭和54年度厚生補導特別企画・第3回自己再発見のための合宿セミナー」(53.3)として、いずれも名大学生相談室発行のものに所収されている。また「現代社会と精神健康 ―集中的グループ経験の実践を通して」(『保健の科学』1980, 22巻, 55.1)の一文もまとめる機会を得た。今後とも、

かかるグループ体験は、ますます続けていくつもりである。

また学生相談研究会議が正月明けの京都で54.1, 名古屋(定光寺, 55.1)で開かれたが、特に名古屋会議は企画・運営の末端にひとりとして名を連ね、「共通一次元年」をめぐるシンポジウム, 症例検討会に参加した。このテーマは、次年度の九州大学に引き継がれて、討議が深められることになっている。ただ各大学の報告にもあるように共通一次試験が導入され、大学受験のチャンスが一回となり、個性の乏しいこじんまりとした学生が増加していることが多くなっているとすれば憂うべき事態であると考えられる。今後、見守っていきたいと思っている。

#### 6. その他の活動などについて

「適応の心理」(藤永保他編『教育心理学』テキストブック心理学1, 有斐閣. 53.4)

「甘え」他31項目。(大山正他編『心理学小辞典』有斐閣. 53.5)

「臨床相談室・家を出るといふこと ― その肯定的側面と否定的側面 ―」(『青年心理』, 2巻11号, 53.10)

「同時面接<平行面接>」他6項目。(内山喜久雄監修; 高野清純・稲村博編『情緒障害事典』岩崎学術出版社. 53.4)

「現場研究の進め方 ― 事例研究」(『教育心理』第27巻1号. 53.12)

「子どもの悩みとその克服」(国際児童年記念シンポジウム『子どもと環境』その6『子どもの悩み』, 中日新聞社. 54.8)

《以下略》

(55.8.5記)

## 研究経過報告

村上 隆

今年は余り多い年とは言えなかった。主たる仕事は従来通り、3相データの因子分析法と一次元の尺度構成であった。

前者については、昨年の紀要論文以上のさしたる進展はなかった。多少シュミレーションを追加する等して、日本行動計量学会第8回大会において発表した。このテーマについては、幸い今年度の科学研究費が交布されることにもなったので、今年に残りは、主としてこれに時間を割くことにしたいと考えている。基本的には、この3相因子分析モデルのもつ大きなflexibilityを生かしつ

つ、これにさまざまなconstraintsを加えていくことになるであろう。縦断的データの分析法としては、従来のモデルでは測定機会の順序の情報がとりいれられていなかった。この点で、Guttmanのsimplexモデルとの結合も今後の努力目標となりうると考えられる。

後者については、本紀要に執筆したような一種のまとめを必要とした。今後、幾つかの「技術的」問題の解明に努めたい。

ところで、昨年も少し記したが、最近流行の認知科学に私も関心もちつつある。計算機科学と内観主義(?)